

洞海湾をまたぎ、北九州市のランドマークの一つになっている若戸大橋。1962年の開通当初は「東洋一の夢のつり橋」と呼ばれた橋を若松区側に渡ってすぐの市街地に、古くから市民の生活を支え、愛されてきた「若松商店街」がある。高齢化や人口減少の波が押し寄せる中、こだわりの商品やサービスで人々を引き寄せようとしている。

「揚げ物と魚、どちらにしますか」「今日は魚かな」

1月中旬、ひさしに「共栄市場」と書かれた小さな市場を訪れた。明るい声の主は、惣菜店「喜田商店」を切り盛りする喜田美津子さん(73)らと、なじみの客たちだ。

68年創業。目玉はから揚げ、肉じゃが、サラダ、煮魚など、店頭の大皿から自由に選んだおかずを詰め込んだボリューム満点の弁当だ。値段は、容器の大きさによって税込み400円と同500円。もともとは量り売り専門だったが、

街角探訪



若松商店街 (北九州市若松区)

人々引き寄せるサービス



惣菜を弁当箱に詰める喜田さん(右)

若松商店街 若松区東部の小規模店が多く集まる区役所周辺地区の通称。「エスト本町」「明治町銀天街」「大正町商店街」など複数の商店街や市場からなる。若松商店街連合会によると、1月末時点の加盟店舗数は約180。北九州市を代表する夏祭りの一つ「若松みなと祭り」(毎年7月)のメイン会場になっており、かつて若松が日本一の石炭積み出し港として栄えた頃の運搬船を模した山車に市民らが乗り、たたる太鼓を打ち鳴らして歌う「五草太ばやし」が見もの。



常連客の要望に答えて20年ほど前に弁当を始めたところ、「安くて、大きくて、うまい」と評判を呼び、昼食時間帯にはサラリーマンや主婦らが行列を作るほどになった。

目替わる頃に仕込みを始めるおかずは、季節や仕入れ状況に応じて食材を少しずつ変え、午後5時半の閉店を待たずに売り切れることもしばしば。「家族離れで心を込めて作っているので、お客さんのうれしそうな顔を見ると、私たちもあしたも頑張ろう」と

と元気をもらえます」。白い息を吐きながら、喜田さんは顔をほころばせた。

「丸窓」の小山きよ美さん(50)＝写真＝は「通路をすれ違うのも大変なくらい、お客さんであふれていました」と懐かしむ。



「商店街と住民の懸け橋になり、大好きな若松をもっと盛り上げたい」と意気込む牛島さん。「商店街の生き残り」と「買い物難民」対策は日本中の課題。この取り組みが他の地域にも広がれば」と願っている。

牛島 誠さん(34)＝写真＝は昨年11月、市街地へ買った物に出かけるのが難しい高齢者などを対象に、軽トラの「若松ふれあい号」で移動販売を始めた。



冷蔵庫を備えた荷台には、商店街で仕入れた生鮮品や菓子、洗剤などの日用品が並び、売値も商店街と同じ。日曜と祝日以外の日中、傾斜地の多い区東部の住宅を中心に巡回する。玄關先まで乗り付け、クリーニングの取り次ぎなどの「お使い」にもできるだけ応えており、利用者からは「見て選ぶ買い物の楽しさを感じ出した」などと好評だ。

商店街の中でも一際レトロな雰囲気醸す「丸仁市場」は、老朽化などのため3月末で65年の歴史に幕を下ろす。市場は51年、合併前の若松市が車庫として使っていた場所を露天商らに有料で貸し出したのが始まり。鮮魚、精肉、野菜、漬物など、あらゆる食材がそろった。100年以上

残る4軒のうち、丸窓など2軒は移転して店を続けるという。小山さんは「子ども頃から親しんだ市場がなくなるとはとても寂しいが、台風や地震にも負けず、店を守ってくれたことに感謝し、記憶に刻みたい」と語った。

「商店街と住民の懸け橋になり、大好きな若松をもっと盛り上げたい」と意気込む牛島さん。「商店街の生き残り」と「買い物難民」対策は日本中の課題。この取り組みが他の地域にも広がれば」と願っている。

「商店街と住民の懸け橋になり、大好きな若松をもっと盛り上げたい」と意気込む牛島さん。「商店街の生き残り」と「買い物難民」対策は日本中の課題。この取り組みが他の地域にも広がれば」と願っている。

(林亮志)